第 559 号 平成3年12月 20 日発行(毎月20日発行)
昭和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1991 年（平成三年）
12 月 号（No. 559）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

スコットランド ベン・ネヴィスから
……大森久雄…（1）
海外の山……（2）
「登山家たちが「明日の山」を語った。」
ナムチャバルワ通信(3)……（3）
大西君よ，安らかに…橋本　清…（4）
周百錬氏逝く……（5）
東西南北
「カナデアン・ロッキーに登る(2)」
「15回続いた「花と氷河の旅」」ほか
福井支部が誕生！……（7）
図書室だより(4)，所蔵山岳地図目録，書籍・雑誌受入れ報告…（7）～（9）
図書紹介……（9）
自然保護随想……(11)
報　告……(13)
「立山全国集会報告」「山を語る講演会」「ナムチャバルワ支援隊報告」ほか
会務報告……(17)
10月理事会，ルーム日誌，山研・ナムチャ合同募金応募状況，新入会員（復活），住所・住居表示変更
お知らせ……(18)

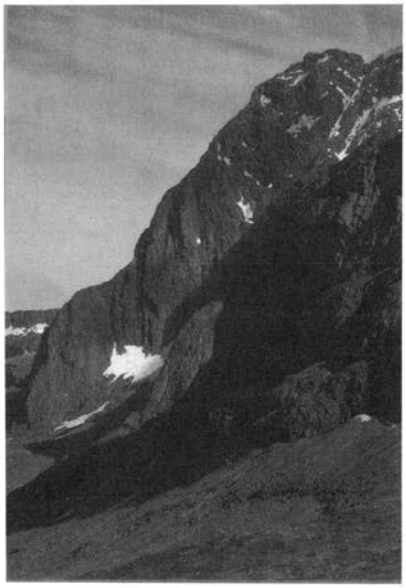
▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話 3234 六六五九

スコットランド ベン・ネヴィスから

大森久雄

今年の七月、ベン・ネヴィスに行ってきた。スコットランドの、というよりもグレート・ブリテン島の最高峰で、標高一三四四㍍。昨年一月に行った南フランス、セザンヌの絵でおなじみのサント・ヴィクトワール山同様、名前は知られていても、日本人はあまり登りに行かない山のようだ。



ベン・ネヴィスの北面

最高峰とはいっても高さからいえば奥多摩・奥武蔵の山なみだが、緯度がおよそ北緯五十七度と高いうえに、登り口が海面すれすれの五〇㍍ほどだから、樹林帯もない北方的景観の中、もろにこの標高を登ることになる。

辻村伊助の『ハイランド』や田中薫の『氷河の山旅』などを読んで、ハイランドにはつよい憧れがあったが、この地方、特に今回行った北西ハイランドは、島国とは思えない雄大な、大陸的・北方的景観がみごとだった。

先の二著にも天気の悪い話がしきりに出てくるし、辻村伊助は「ハイランドに夏はこない」と書いているが、私たちの場合も例外ではなく、ベン・ネヴィスに登った日も、その前後の数日も、曇か小雨。ベン・ネヴィスも、滞在中、その全貌を見せることはついになかったし、ロッホ・ネスをはじめたくさんある湖も、ピートの溶けた独特の黒ずんだ水の色が曇り日に一層濃さをまして、風景全体が鈍色、肌寒い風が広葉樹の林や広漠としたヒースの原に吹きわたり、蕭條とした「スコットランド的」な毎日だった。

スコットランドの東海岸から辻村伊助の旅程を追って行くのが理想だったのだが、現実にはそうも行かず、『ハイランド』紀行のほんの一部をかすめただけだった。しかし、現地の一部でものぞいてみると、八十年も前に、ひとりで未知の、あの荒涼とした岩の山々に踏みこんでいった先人のつよさが改めて思われた。

ベン・ネヴィスは岩山で、特に北面は相当な岩壁になっている。イギリスは岩登りが盛んなようで、ふもとの町フォート・ウイリアムのスポーツショップでもロンドンの本屋でも、岩登りの本がたくさん並んでいた。ハイランドでも結構な岩山がたくさん見えたし、ウェールズのスノードン周辺にもいい岩山が多いそうだ。

ベン・ネヴィス南西面の登り口はキャンプ場と牧草地で、下半部は箱根の明星ヶ岳に似ていると『ハイランド』には書かれているが、どこをさしてそ

ういったのか、箱根よりもはるかに荒涼としていて雄々しく、私にはそう見えるところはなかった。よく整備された道を一時間ほど登ると、霧ヶ峰のような草原と池がある。このあたりから上部は岩礫帯で、広々とした斜面に北岳や間ノ岳付近のような石の道がつづく。傾斜は急だが、道は大きくジグザグを切っていて、とても登りやすい。途中で雪田を二つ横切る。

最高峰だけあってやはり人気があり、登山者は結構多く、山の上か下、視界にはいつも人の影がある。中高年よりも親子づれや若い人が目につく。寒いのにショートパンツ姿が多い。登り口から三時間ちょっとで山頂。付近は平らで、広々とした岩の原だ。

辻村伊助の時代には山頂に小屋があったが、いまは石垣の残骸のみ。冬の積雪を配慮してあるのだろう、二㍍ほども石を積みあげた上に、カマボコ形の小さなシェルターがのっている。三、四人も入れば満員で、その時も先客がいて中に入れず、仕方なく氷雨にうたれながらビスケットをかじる。寒いので足ぶみをしているその足もとの岩の間には、たべかすや袋の切れはしがいっぱいつまっていて、ゴミ一つない登り道とはまるで違うこの山の一面を見ることになってしまった。

帰りがけに北側をのぞくと、たしか

海外の山

登山家たちが「明日の山」を語った。

この人たちは、本気で話している。

それが、十一月九日から十三日まで東京、富山で開かれた「山岳環境保護国際シンポジウム」を見ていての感想である。

ヒラリーも、メスナーも、ボニントンも、エルゾーグも、持参のスライドやドキュメンタリー・フィルムをまじえ、今自分たちがしなければならないことを、真剣に語った。

ネパール、パキスタン、インド、ソ連、中国など高峰をかかえる国々からの代表の言葉にも、熱がこもった。

「四日間で大学一年分の勉強をしました」と、オブザーバーで参加したブータン政府観光局のドミニク・シトリングは、言った。

山に登ることに取りつかれていた人類が、わずか半世紀の間に、そこを「攻撃」する姿勢から、「守る」姿勢に転じよう、としている。「東京会議」は、その現場だった。

ヒラリーは、海を見て育った幼少時代から山に登るにいたったいきさつ、ニュージーランドの山々から、ヒマラヤに通いはじめた成年時代を語り、最後に今年、クンブ氷河ベースキャンプで出会った何百もの人と、巨大なゴミの山について報告、「今や登山家こそ環境保護の最前線にいるべきと思う」と述べた。

エルゾーグは、四十一年前に撮影された人類初の八千㍍峰「アンナプルナ登頂」の映像記録を「おそらく日本初公開」と言いながら見せ、「地元の人々と協力して、人間の手で、山々を昔の状態に取り戻そう」と呼びかけた。

メスナーは、「もう何かを山に残すこと—たとえば頂上に記念品を置いてくることも—は、やめよう。この先二百年は、山をきれいにするために努力しよう」と訴え、南極点徒歩行の時の体験として、「何も残さないよう食料は全てゼラチン膜で封じて持っていった。ゼラチンは最後にはスープに溶かして飲んだ」と報告した。

無論、キャンプ設営地のゴミをを除去することだけが、重要なのではない。ラジオ無線専門学校の教授でもあるソ連のエベレスト登頂者、ミスロフスキーは「確かに無用なゴミの存在は、私たちの心を傷つけるが、本当は、高所のゴミ、たとえばサウスコルのボンベなどは、深刻な自然破壊にはつながらない。そこは天然の冷凍庫だからだ。山麓、人々の住む所の汚染こそ真剣に取り組まなければならない」と筆者に語った。

著名な登山家たちを招いての、単なるお祭り騒ぎ、と思った人々もいたかもしれない。「山岳四団体共催」という割りには、山の自然保護を掲げる人々の反応は冷やかだった、ように思われる。

が、出席者は、そろって「日本でこのような本格的な会議が開けたことを感謝する」とお世辞抜きで語っていた。「東京での素晴らしいシンポジウムのこと、富山の人々の暖かい歓迎を国に帰って、山の雑誌などを通じて詳しく伝えたい。それにしてもボランティアでよくここまでやれましたね」と、最後にボニントンはもらした。

この一年、不慣れな国際会議の準備に苦労した裏方たちは、その一言で報われたことだろう。（江本嘉伸）

に相当の岩壁のようで、足もとから切れ落ちた岩肌が濃い霧の中に消えていた。（写真は現地での絵はがき）

東西南北

カナデアン・ロッキーに登る(2)

原　謙一

周りの山々の高さは殆んどが三千㍍前後ですが、アシニボインだけは抜け出ていて三六一八㍍あります。裾は美しい針葉樹林ですが、頂上付近は氷河や岩でザイルを使わないと登れない山が殆んどです。従っていつまでいても飽きることのない美しい風景で、再び訪れてみたくなるような所です。

前半は天気があまり良くなかったが、後半天気の安定するのを見計って途中の避難小屋まで登り近くの低い山を登って様子を窺っていました。

アルペンメドウのなかはしっかりしたトレイルもあり道標もありますが、この小屋へ登るにはしっかりしたものがなく、氷河か岩壁を適当に登らなければなりません。この小屋はトタン張りで、中は二段ベットになっており、テーブル一ケ、椅子、調理台、流し場などが付いている立派なものでした。

氷河のなかより突き出た広い岩棚のような所にあり、雪崩などにつぶされないように建てられてありました。水は氷河から流れ出て来るものを使うことが出来、近くには立派なトイレも建てられていました。

そして最終日に天気が良さそうだったので、早朝小屋を出発しアシニボインに向いました。ヘッドランプをつけて、ズルズル落ちる道のないガラ場を

◎ナムチャバルワ通信(3)◎

計画通り進行していれば、今回登頂の報告を行うことができるはずでしたが、自然の脅威はそんな生易しいものではなく、十月十六日、C3からC4へのルート開拓中、偵察隊にも参加した隊の中心人物であった大西隊員を雪崩で失ってしまいました。偵察の時もストレートに難無く通過しており、全く予想外の出来事でした。これも久しぶりの好天の訪れに飛び出した我々への自然の厳しさの教えかもわかりません。

ただ、それ以降の大西隊員の遺体の収容はスムーズで、二十六日には東京からのご遺族の方々を迎えて荼毘に付すことができました。夜中中、火の中に木を投じながら一九八八年の三国友好登山隊の時、昨年の偵察時の大西隊員との行動を思い出しながら、涙がとめどもなく流れ落ちるのを禁ずることができませんでした。

支援隊の方々にも本来ならばベースキャンプで登山隊との交歓会を行う予定でしたが、再計画の都合上、一部の隊員しかお会いすることができませんでしたが、一部の人々には故大西隊員の荼毘の場所やC1を訪れていただいたり、また遠路はるばるの差し入れを頂いたり、無線で交信したりと楽しい時間を過させて頂くことができました。

NAMCHA BARWA 1991
日中国交正常化20周年記念

さて、登山の行方の方は、十月二十日の総指揮部にて登山の再開、続行が確認され、上部の悪天候の間に着々と準備が進められて来ました。二十七日には再び日中双方の隊員がC2に集結し、二十九日上部キャンプへ向けての行動が再開されました。

しかし、十一月に入っても天気は悪く、C3からC4を窺いながらも、三日にC4を建設しましたが、あまりの風雪の激しさに、四日にはいったんC3まで退き、好天を待ちました。十一月七日、十月三十日以来の好天が訪れ、再びC4入りをし、C5への荷上げを三日間にわたって行うことができ、荷上げ後、八日、九日と順次C2へ下りました。十日には村木副総隊長もC2入りをされ、最終ステージの行動計画を日中双方で確認しました。

隊員は二日間休養の後、第一次登頂隊は十二日にC2を出発し、十四日にはC5を、十六日にはC6を建設し、十七日にはいよいよ初登頂の一瞬を迎える予定です。隊員一同何とか晩餐会に間に合うよう帰国し、会員の皆様方に今回のナムチャバルワ登山に対するご支援のお礼を申し上げたいと思っております。

（一九九一年十一月十日C2にて　**重廣恒夫**）

ノースリッヂ目掛けて登って行きました。約一時間で薄明るくなり、リッヂの取り付きに到着、ハーネスなどを付けて本格的な登りにかかる。ルートは必ずしもリッチに忠実ではなく、北壁側の登り易い所を適当にルートを見つけて登る。

遙か東方の鋸状の連峰群の上へ朝日が顔を出す。日本の山と違ってとても眩しく感じる。やはり空気が澄んでいるためだろうか。今日の快晴を約束されて快調に登り続ける。途中何ヶ所かブルーアイスを通過したが、距離が短いのでアイゼンを使わず、ピッケルでステップを切って登った。

どこ迄登ってもロッキー独特の脆い岩で気が休まらない。それでも次から次へと岩の層の色が変って来るので、何とか気が紛れる。下から眺めて美しい層に見えた岩が、登ってみると本当に良くわかる。植物は全々生えて無くてコケも見られませんでした。ルートの左右のところどころに捨て縄が残っていて、下りも各自適当なルートを下り、必ずしも皆が同じルートを、登り下りしているようではなさそうだ。頂上近くなって来たあたりからリッヂを忠実に登る。最後にオーバーハング気味の大きな大きな黄色い壁を越えると、ゆるい雪稜となり頂上へ続いていた。南北に長い頂上で、東側に大きな雪庇が張り出していて、正確には頂上は確認出来なかった。

雪の中からわずかに顔を出していた緑色の記録入れの箱を掘り出し、ノートにサインをして登頂の喜びを確認した。頂上から東側は眺めることが出来ず、西側は遠く遙か彼方まで氷河の峰々が延々と続いている。また近く眼下には氷河と森と湖が美しく眺められます。

快晴無風しばらく景観を楽しんで下山開始。登りとほぼ同じルートを、数回の懸垂下降をくり返し、足の下へどんどん下る。雪が付かない斜面であることが納得出来る。登りはあまり気にしなかった高度感を改めて感じ、良くこんな高い所まで登ってしまったと慎重に下った。小屋からの往復約十時間かかりました。

（一九九一年八月十七日登頂）

△　△　△

追悼

大西君、安らかに

橋本　清

大西宏　二十九歳　あまりにも若すぎた死にただ考えさせる。誰にも信じられない出来ごとが現実に起った。ナムチャバルワ峰（七七八二㍍）の六五〇〇㍍付近にて雪崩に巻き込まれ亡くなった。あの元気だった大西が、なぜと未だ誰もが信じることが出来ない。大西とは明大山岳部の後輩を越え、一九八八年日中ネ三国合同登山隊以後、良い山仲間として、北極点アイスウォーク隊に参加したい相談など、彼独特の参加することを前提に相談とも報告ともつかない話を良く聞かされた。

一九八九年、北極点アイスウォークに成功してからは、すっかり自信を付け、秋のサガルマータ（八八四八㍍）登頂へ。この時も雪崩に会い、苦しい登攀をしいられ、全てをバネに、九〇年のマカルーへ。マカルーでは精神的にも肉体的にも充実した登頂をし、この頃より本当の意味でのリーダーシップを心得え、南極点アイスウォークの計画が始ってからは後輩に対する当りも厳しく、一段とリーダーシップを発揮、名実共に南極隊の中心となり隊を運営していた。この大プロジェクトを常に意識し、日頃のトレーニングなど全てを南極に向けていた。南極の準備が始まった時を同じくして、日中合同ナムチャバルワ峰の登山計画が持ち上がり、第一次偵察隊に参加、登頂ルートを見いだし帰国。本年九月の本隊出発を控え、彼は南極とナムチャバルワの準備に追われる日々を難なくこなし本隊に参加。

隊ではいつも先頭に立って行動し、常に南極を意識していたかのような行動だった。その彼がなぜ雪崩でと本当に信じられない。ナムチャルバルワの登攀を半ばにして、南極行を途中で断念せざるを得なくなったことは、かれ自身本当に無念であると同時に、我々山仲間誰もが残念で本当につらい結果となってしまった。大西が山を始めてからの、この十年は実に充実した素晴らしい十年であったことだけがはっきりしている。この段階で終るとは誰もが信じることが出来なかっただろう。誰もが希望をかなえさせてやりたい、ナムチャルバルワの登頂、南極点に立たせたい、ただそんなことだけを思い、あのC1下での茶毘を最後に大西の青春は終ってしまった。安らかに。

在りし日の大西氏（吉田宏氏撮影）

訃報

周百鍊氏逝く

中華民国山岳協会理事長の周百鍊氏が去る九月十一日亡くなった。享年八十三歳。

葬儀は十月二十九日(火)、台北市民権東路市立第一殯館において、ご遺族、省政府要人、山岳協会関係者多数を集めしめやかに行われた。未亡人は周呉秋冬さん。

周百鍊氏は若くして日本の長崎医大に学び、「周内科医院」を設立、地域医療に尽すとともに省政府委員などの要職にあるかたわら、山岳をこよなく愛し、山岳協会の理事長としての重責も果され、わが国にも度々足を運ばれた。

台湾を訪ずれた日本の岳人たちはすべて氏のお世話になったといっても過言ではない。まことに惜しい人を失ったものである。ここに謹んで追悼の意を表します。

（A・O）

十五回続いた「花と氷河の旅」

坂倉登喜子

今年のエーデルワイスを訪ねるヨーロッパ・アルパイン・ツアー「花と氷河の旅」は、六月頃既に定員オーバーで、乗物の増席のやりくりで大変でしたが、何とか全員五十二名の団体で、去る八月七日成田を出発、全コース快晴に恵まれて、花と展望を楽しみ全員無事に、予定の行程を歩き、八月十八日元気に帰国しました。

参加者は三十代から七十代までで、A班・健脚、B班・一般、C班・初歩と分けて、レベル、年齢、目的によりコースを選択して参加、それぞれに各自に適した歩き方で皆さん元気に歩かれました。

今年は何時もと逆になつかしのミューレンを最初に訪れ、十五年泊ったエーデルワイス・ホテルのご主人が亡くなり、ローズマダムが今回を最後に引退されると言うことで、涙ながら別れを惜しみました。ここは日本山岳会の土曜会の先輩、神谷恭氏の泊られたホテルで、是非と紹介され、親身に待ちうけてくれていたマダムとの心のつながりが深まった宿でしたが、とても淋しい思いになりました。

しかしアイガー、メンヒ、ユングフラウの展望は変らず見事なので、また来年も若い後継者の同ホテルに泊るつもりです。

ツェルマットからは例年訪れるウーターロート・ホルンのマッターホルンの真正面に見える丘で、沢山のエーデルワイスの群落に出合い、カメラタイムがたりない位で、夢中で花を接写し大感激でした。今年は北海道礼文島のレブンウスユキソウ、ヒマラヤ四〇〇〇㍍のエーデルワイスの大群落。そうしてスイスのエーデルワイスとどれも皆花盛りの若くてきれいな花に出会うことができて感激でした。

ツェルマットではスイス山岳会支部長のウィリー氏をホテルの夕食にお招きして、プレゼントを贈り、食後特別に九時から無料で、山岳博物館を見学させて頂きました。

「今日寄贈された登山靴です」と鋲の抜けた古い登山靴を見せて下さいましたが、毎年展示が少しずつ変っていて、資料が多いのに驚くばかりでした。

最後は氷河特急でサンモリッツへ行き、コロバッチの雪を踏み、下山後セガンティニ美術館で、生、自然、死の三部作の名画を観覧、チューリッヒでは夜のお別れパーティで「今日の日よさようなら」を歌い帰途につきました。

△　△　△

南方熊楠とガウランド、ウエストンの交流について

開発秀三

去る七月十七日から二十九日まで、新宿・小田急百貨店で開かれた、「超人・南方熊楠展」は、南方熊楠の偉大さを見直す人々で大変な賑わいをみせていました。ところで、この南方熊楠と日本登山史に関連の深いガウランドやウエストンとの交流を示す事実が、「南方熊楠日記」の中に書き残されていることを数年前に気付いておりましたが、すでに周知のことと思い、どなたにもお話をしたことがありませんでした。今回の展覧会がきっかけで二、三の方にこの話を申上げましたところ、会報『山』で発表するようにとのおすすめを頂きましたので報告させて頂きます。

平凡社版・南方熊楠全集　別巻第二（日記・年譜・著述目録・総索引）

ウエストン関係（ロンドン日記六十六頁）（年譜二六三頁）一八九五・七・四木の項

「午後、博物館にて Weston（日本より帰来りし坊主）にあう」

ガウランド関係（ロンドン日記、八五、八七、九十頁　年譜二六四頁）一八九

七・五・十三、五・二十八、五・二十九、六・十二、六・十四の項にガウランドの名前が出てきており、同席して対談したり、本を借りて返却するなどの交流関係が記録されています。このほか二三七頁、二三八頁にもガウランドの名前が出て来ます。

この全集では他にもガウランドの名前が出て来ますし、アストン、サトウ、チェンバレンの名前も出てきます。

全集第六巻　新聞随筆二五五・二五六頁　ガウランドという姓のルーツについての説明があります。

全集第七巻　書簡一・履歴書　土宜法竜宛書簡　三八〇頁、神社合祀問題関係書簡　五八八頁にガウランドの名前が出てきます。また、十七頁にアストン、サトウ、チェンバレンの名前が出てきます。

全集第八巻　書簡　柳田国男宛書簡　一九二頁、一九七頁にアストン、チェンバレン、年譜　二六四頁にアストン、サトウの名前が出てきます。

ウエストンの乗鞍岳登頂と富士山

田畑真一

ウエストンは明治二十五年、乗鞍岳（三〇二六㍍）への登頂をめざした。登頂目的についてウエストンは「私達が平湯へ来た直接の目的は、西から乗鞍へ登るためだった。東側から登った人は五、六人あったと聞いていた。けれども、今まで平湯を通ってあの山脈を越した僅かの外国人で、この乗鞍岳を飛騨側から探検しようと考えたものはなかったのである」（ウエストン『日本アルプス－登山と探検』）と述べている。これは島田巽氏をはじめ、川村宏、三井嘉雄、安江安宣の三氏が「乗鞍岳はガウランド（W. Gowland）によって登られていたが、その登路は東側の大野川にとられていた。ウエストンは、外国人による西側からの初登を狙ったのである」（「W・ウエストン年譜」、『山岳』第八十二年）といわれるように、記録的登山をねらったものであった。

ウエストンは首尾よく登頂に成功した。そして山頂からの展望について「かくて登山者に酬いられるものは、日本アルプスのこの上もなく立派な峰々の壮麗な景観である。北に向かって目前には立ち昇る霧の塊の中から、偉大な岩や急峻な山稜が聳え立ち、下部を包む雲の幕は、それらを一層雄大に見せている。南方に当たり、頂上に噴火口の窪みを見せた御岳の高峰が、低くて広い方の鞍の彼方にくっきりと灣曲を見せている。駒ヶ岳と甲州の山々の彼方には、いつも見える富士の英峰が懐しく私達を迎えている」（前掲書）と述べている。

私はウエストンは、よくぞ富士山（三七七六㍍）の姿をとらえたものと感服する。これは富士山への関心が高かったために他ならないと思う。ちなみにウエストンは同年五月には富士山に登頂している。島田氏らが紹介（前掲書）している通りである。だいたい、乗鞍岳から富士山の展望など、あまりにも困難である。好天時、それも雲が見られないときであっても、山頂部あたりだけが肉眼で何とか見えるかどうかという状況である。それで一般の人びとなどその方向を見定ることすら困難ではないかと思う。私は乗鞍岳から富士山の展望について記した本を日本交通公社の『上高地・乗鞍岳・美しが原』の他に見たことがない。もし、見落しがあれば、ご教示を頂きたいものである。そんなわけで、前記の記事は貴重であると考える。先に地元、安曇村役場に問い合わせしてみたが、富士山が見えるかどうかについては、わからないとのことだった。役場を責めるわけにはいかない。それくらい乗鞍岳からの富士山については、知られていないからである。

〈別記〉展望の確認につき、東京大学東京天文台乗鞍コロナ観測所の関係各位のご配慮を頂いた。記して謝意を表します。

天狗さんと新緑の山歩き

中井修二

五月二十三日御殿場から山中湖方面行のバスに乗り私達十二名は籠坂峠で降りた。

緩い坂道を登り、富士霊園を横切って山道に出て約十分後に標示のある分岐点を右へと微かな踏跡を畑尾山のブナの原生林へと自然観察を目指したが、関係の地図に標高（一三〇八・六）はあるが山名はなく、入山者が少い故にか山の自然保護はよく保たれていた。

山への進路指導は同行の天狗さん（ドイツ人ハンス・シュトルテ＝丹沢自然保護協会副会長、在日五十七年、当年七十八歳）で畑尾山の知識に通じ、この山歩きの主動的な山岳人である。

径は昔の宝永山噴火による火山灰の砂礫で足の運びも他所と違って柔らかであり、雑木林の若葉が美しく、ブナの若木の混生も多くあり花が散り落ちているのを踏みながら歩いた。天狗さんがほど好く休憩、出発の合図を掛けてくれるので一同の歩調も整えられ、畑尾山鞍部の小径に出て東南へと右折

した。

天狗さんが私達の食堂に向いましょうと言う。私は素朴な山小屋でもあるのかと思っているうちに、天狗さんが左側雑木林に二本のブナ巨樹の在る場所へ這入り、自然の山食堂ですと言う。林の下草は丈三十㌢位で環境が良く恰好の食事場所であると思った。

私は直ぐブナ巨樹の根元へ寄り樹幹、樹高、樹枝等の堂々とした樹相を眺め、二本揃ってよくぞ幾百年の風雪に耐えて逞しく樹齢を得たものと感動し、畑尾山の夫婦ブナと称したい。

私達は両巨樹と向い合い食事にかかると、天狗さんが持参のワインの栓を抜いて私達に頒けて下さり、皆が有難うと立ち上って乾杯した。天狗さんは私の右隣りに腰を下していた「このブナ樹はどの位の年数ですか」と私に問うたので、多分六百年から七百年位はあるでしょうと答えた。

食事を終えた天狗さんは林の中をあちこちと歩き出し、やがて一本のヤマシャクヤクを発見し、皆が集まり見る。

純白の丸型の花一輪を着けている。私は始めて接した植物で花をじっと見ながら想い浮べたのは、白い衣裳に着飾って神殿で舞う巫女に似ているから「畑尾山の巫女」と呼ぶに相応しいと思った。草丈は約三十㌢、花の直径は四㌢位の大きさがあり貴重な植物、山の花は山の花として永久にこの山に遺すべきで自然保護の肝要を痛感した。

アザミ平に向う道すがらには鮮やかな紫ヤシオツツジが真盛りで私達を見送ってくれた。

一日の低山歩きで新緑の数々から、山の美の接点を得たことを喜び、天狗さんという得難い指導者を得たことを感謝している。

〔俳句〕

秋の立山

小林碧郎

野分け晴攀ぢて雄山の神酒を享く

剱岳巌頭澄みて雪を待つ

絮失せて露に深紅の稚児車

夏羽脱ぐ雷鳥に霜来つつあり

パラグライダー放ち秋澄む大汝山

（九・二八～二九　支部懇談会立山集会にて）

福井支部が誕生！

北陸三県は、環日本海の中でも特に登山人口が多く、親密度の高い所ですが、その中、富山・石川では既に支部として活動しています。しかし、福井には今まで支部がなく、かねてより、両県の有識者の間では支部設立の動きがありました。それがこのたび所定の会員数に達し、去る十一月八日、福井県職員会館において支部設立総会が行われ、所定の手続きを終え、ここに本会二十二番目の支部とし発足することになりました。

なお、支部役員はつぎのとおりである。

支部長　中村　義（四九七四）
常任委員（事務局長）
宮本数男（一〇六二二）
委員　関　孝治
（副支部長・五九〇〇）
増水廸男（六二八九）
牧野治生（一〇九九三）
井上泰利（一〇九九六）
監事　吉村和義（七六二六）

図書室だより (4)

▼アルパイン・ジャーナルはご存知の方も多いと思いますが、一九八八年から出版元が替わり、装丁も一新したものになりました。編集者は毎年入れ代わり悩める様が見えましたが、基本的には世界の山を対象に広く原稿を集めています。トップ記事はエヴェレスト・カンシュンフェイスを登ったあのS・ヴァナブルズがサウスジョージア島の二三三一㍍の未踏峰に登ったというもので、その「地の果ての英国領土」へは軍艦に同乗して行ったようです。しかしこの記事よりはアマダブラムにアイルランド人として初登したという記事の方がまだ面白い。

マイクル・ウォードが連載している中央アジアの山の研究はそれなりに価値があると思われます。入山が可能になったカムチャッカのクリチェフスカヤ峰の初登攀の記録を調べたロシア語からの翻訳記事もあります。クーリッジが百部限定で発行した『一八六五～一九〇〇年のアルプス登山』など私家版の山岳書目録も載っております。

アルパインクラブの会長には一九九〇年度からG・バンドに代わってHRAストリーザーがなっています。いずれも一九五〇年代に活躍したヒマラヤニストです。

図書室の照会サービスとして開始されている、コンピュータ入力されたヒマラヤのデータは、六〇〇〇㍍以上の登山記録三五〇〇以上が登録済みになっており、一七五〇峰におよんでいるといいます。現在は中国領の登山と英語以外の記録に取り組んでいるようです。

―9頁に続く―

書　籍・雑誌　受入れ報告　1991年10月

著　　者	書　名／雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈／購入別
The American Alpine Club	The American Alpine Journal	228×152/378 pp	AAC	1991	発行者寄贈
Mountain Club of S. Africa	The Journal of the M. C. of S. A.	235×155/165 pp	MCSA	1991	発行者寄贈
星野貞二	私のスケッチ紀行　信濃路と甲斐路を行く	A 5/141 pp	さきたま出版会	1991	発行者寄贈
建設省国土地理院	日本の湖沼アトラス	A 3/68 pp	日本地図センター	1991	購　入
日本山書の会編	山書研究　33「ウェストンの北岳」他	A 5/154 pp	日本山書の会	1989	発行者寄贈
日本山書の会編	山書研究　34「奥美濃文献目録」	A 5/215 pp	日本山書の会	1990	発行者寄贈
日本山書の会編	山書研究　35「異人たちの日本アルプス」	A 5/444 pp	日本山書の会	1990	発行者寄贈
日本山書の会編	山書月報　315～345	A 5	日本山書の会	1991	発行者寄贈
小野有五・大森弘一郎	神々のみた氷河期への旅	B 5 変形/88 pp	丸善	1991	発行者寄贈
福岡まいづる山岳会	キナバル登山報告	B 5/73 pp	同山岳会	1991	発行者寄贈
C. Boningtong	THE EVEREST YEAR	250×160/256 pp	Viking	1987	購　入
A. Steck, S. Roper ed.	ASCENT vol. 5	280×220/207 pp	Sierra Club	1989	購　入
M. Peyron	GREAT ATLAS TRAVERSE vol. 2	180×120/134 pp	West Col	1990	購　入
根深誠	山の人生　マタギの村から	B 6/222 pp	日本放送出版協会	1991	発行者寄贈
清水栄一	決定版　信州百名山	B 5/238 pp	桐原書店	1990	発行者寄贈
日本山岳会青年部編	日本山岳会慕士塔格登山隊 '91 報告書	B 5/20 pp	日本山岳会青年部	1991	発行者寄贈
The Alpine Club	The Alpine Journal 1991/92 vol. 96	220×145/328 pp	Muller	1991	発行者寄贈
The Himalayan Club	The Himalayan Journal 1989/90 vol. 47	215×138/258 pp	HC	1991	発行者寄贈
廣瀬誠編	越中立山古記録　第三巻	A 5/306 pp	立山開発鉄道	1991	発行者寄贈

日本山岳会所蔵山岳地図目録

A官製　B個人、団体　a シリーズ　b 単作　c 付録　d 概念図　e その他

分類番号	発　行　者	発行年	地　図　名	縮　尺
B7-0a	AMERICAN GEOGRAPHICAL SOCIETY	1945	BOGOTA　NB-18	1 : 1,000,000
	do.	1948	QUITO　A-17	do.
	do.	1947	PIURA　B-17	do.
	do.	1949	LORETO　B-18	do.
	do.	1958	CERRO DE PASCO　C-18	do.
	do.	1962	LIMA　D-18	do.
	do.	1947	ATACAMA　SG-19	do.
	do.	1942	COQUIMBO-SANJUAN　H-19	do.
	do.	1949	SANITAGO-MENDOZA　1-19	do.
A7-0a	WORLD AERONAUTICAL CHART	1963	GULF OF GUAYAQUIL　WAC-951	do.
	do.	1963	AGUJA POINT　WAC-1011	do.
A7-0a	ONC	1966	L-26 BOGOTA	do.
	do.	1965	N-25 PERU	do.
	do.	1965	P-26 BOLIVIA, CHILE	do.
	do.	1965	Q-26 CHILE	do.
	do.	1966	Q-27 ARGENINA	do.
	do.	1965	R-23 ARGENTINA, CHILE	do.
A7-2a	INSTITUTE GEOGRAPHICO MILITAR	1985	COTOPAXI	1 : 50,000
	do.	1969	CHINBORAZO	do.
B7-2b	OAV		CORDILLERA BLANCA	1 : 200,000
B7-2b	OAV DAV		CORDILLERA BLANCA NORDTEIL	1 : 100,000
B7-2b	OAV		CORDILLERA BLANCA SUDTEIL	do.
B7-2b	H. KINZL	1964	NEVADO HUASCARAN	1 : 25,000
B7-2b	S. KODAMA	1984	QUBRADA HONDA	1 : 50,000
B7-2d	横地康生	1970	CORDILLERA BLANCA	1 : 100,000
B7-2b	DAV		CORDILLERA HUAYHUASH	1 : 50,000
B7-2d	SSAF	1952	ANDES von PERU CB und CH	1 : 300,000
B7-2b	RGS J. HARRISON	1957	CENTRAL ANDES OF PERU	1 : 500,000
B7-2b	OAV	1987	CORDILLERA REAL ILLAMPU	1 : 50,000
B7-2d	SERVEI GENERAL D'INFORMACIO	1986	ACONCAGUA	C 1 : 100,000
A7-2a	INSTITUTE GEOGRAPHICO MILITAR	1950	CERRO ACONCAGUA	1 : 50,000
	do.	1951	LAS CUEVAS	do.
	do.	1951	CERRO AMEGHINO	do.

急告

日中合同ナムチャバルワ登山の打ち切りに当って

ご承知のとおり、ナムチャバルワ登山については、読売新聞社、日中友好協会全国本部との共催にて、日中国交正常化二十周年を記念し、会員各位から全面的なご支援を頂き、去る九月二十六日ラサ出発以来、ほぼ二ヶ月に亘り、日中両登山隊員の緊密な協力のもと、果敢な登山活動を続けて参りました。

この間、登山初期の異常降雪、それに伴う大西宏隊員の遭難死という不運に遭遇、その後十月二十七日からの登山再開後も西からの烈風のため、前進キャンプの設定も困難を極めておりましたが、漸く十一月二十日、二十二日の両日に亘り、最終キャンプ（六七〇〇㍍）からの登頂を試み、頂上直下の岩壁も突破して七四六〇㍍の地点まで登路を拓くことに成功したものの、頂上まで三二二㍍の雪面が極めて不安定で雪崩も発生するに至ったこと、また長期に亘る登山活動のため、準備した食糧、燃料も使い果すに至りましたので、これ以上の登山続行は無謀と判断し、涙を呑んで今年の登山を打ち切ることに決定致しました。

この間、各位より頂きました心からのご支援には、お礼の言葉もございません。誠に有難うございました。

なお、当地域への入域と同峰登山については、日中合同登山を前提に、一九九二年々末までのご許可を中国政府当局より頂戴しており、また中国側に於かれましても私共日本山岳会との合同での再挑戦を強く希望しておられますので、今年に引き続き、一九九二年に於ける再登山を企画致しておりますので、何卒変らぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げる次第でございます。

次代に残そう美しい山と溪

―7頁より―

▼今年のヒマラヤン・ジャーナルの表紙は、チョゴルンマ氷河のモレインの色模様が美しく、昨年までの黒一色の冴えないものから一新しています。編集者は昨年からカッパディアに替わり、デザイン、活字を変えてスマートになっていますが、今回も索引が付いていないのは残念です。

現インド測量局長官SMチャダーが初代長官のG・エヴェレストの生誕二百年祭に行った記念講演が巻頭に載せてあります。測量局地図は国家要請向けに作られており、登山者以外は関心外のものでしたが、近頃は都市図、旅行図等一般への考慮も行われつつあるとのことです。

記事全体の七割以上はインドヒマラヤの山で、編集者自身も二篇長い原稿を寄稿しています。AAJにも載っておりますが、二人のユーゴスラヴィア人によるガンゴトリのバギラティⅢ峰西壁の記録（続けて彼等は西稜よりのエヴェレストを目指したが悪天のためサウスコルより登った）が目立つ位で、毎度のことながらインド人によるインナーライン外側の落ち穂拾い登山が載せられています。

追悼はヒマラヤンクラブ育ての親の一人J・B・オーデンの他、P・バウアー、E・シュナイダー、名誉会員であった三田幸夫さんらが載り、世代交替を印象付けられます。

▼今回の「山岳地図」は、南アメリカを掲載いたします。アンデスの特定の山についてはかなり良いものが作られていますが、広大な山域を概観する地図はありません。大部分の当該国は一〇万分の一より縮尺の大きいの地形図を作っていますが、手に入れるには時間がかかります。

（図書管理委員会）

図書紹介

Mountaineering and Mountain Club Serials:a Guide to English Language Titles

VIRGINIA SEISER and ROBERT LOCKERBY 著

山関係の英文定期刊行物のガイドブックである。

米人登山家でかつ大学図書学教授の二人が彼等の山岳会ルームに山積みにされている本の整理を依頼され、また過去の山岳会の記録を調べようとした時に、山岳刊行物が十分に整理されて

いないことに気がついた。

米国内二三ヶ所の山岳会図書室や一般図書館およびケニヤ山岳会の図書室を実際に訪問し、また英独加の山岳会出版カタログと七図書館とのオンラインデータベースから収集した情報をもとに世界二十ヶ国、五八〇にのぼる刊行物を紹介するのに成功している。

一般の山登りからアイスクライミング・遠征登山・山岳救助等幅広い山の関係書で、かつある間隔で発行された刊行物を対象にしており、THE ALPINE JAURNAL のようなものから町の山岳会の会報・大学山岳部報そして出版社の刊行物も含まれている。

各刊行物についてはそれぞれの発行母体名、その住所、創刊号発行年、発行継続の状況、当刊行物について記している文献や当刊行物を保管している図書館・図書室についても記している。

十九世紀から今日まで継続刊行されている THE ALPINE JAURNAL（一八六三年）、NEW ZEALAND ALPINE JOURNAL, SIERRA（カルフォルニア）、MOUNTAIN CLUB OF SOUTH AFRICA JOURNAL, MAZAMA（オレゴン）、CLIMBERS CLUB JOURNAL（ロンドン）に混って SANGAKU（山岳一九〇五年日本山岳会）が紹介されている。

日本の継続中のものとして IWATO YUKI（岩と雪・山と渓谷社）と JAPANESE JOURNAL OF MOUNTAIN MEDICINE（登山医学・日本登山医学研究会）が記されている。また INAKA（一九一五〜二四、ベルゴット編六甲山と岩々の回想）や MOUNTAIN WORLD（一九五三〜六九）のように惜しくも廃刊になった刊行物も多数記されて貴重な資料となっている。

巻末には発行母体の山岳会や国別刊行物の索引あり。岳人の筆者が文献調査の際に山岳図書の未整理を認識し、編集を思い立ったものだけに刊行物の調査・閲覧そして図書照会に利用できるユニークな書物である。

一九〇〇年 The Scarecrow Press Inc. 刊　一八〇頁　**（南井英弘）**

南極大陸横断
―国際チーム二一九日間の記録―

ジャン＝ルイ・エチエンヌ著　高橋啓訳

本書は副題にもあるように、一九八九年七月二十七日から七ヶ月間かけて六ヶ国六人が犬橇とクロスカントリー・スキーで南極大陸を横断した記録である。著者のJ＝L・エチエンヌは仏国の冒険家でスポーツドクターである。

一九八六年、単独徒歩で北極点に到達した。この時の記録に「たった一人の北極行」（白水社、竹内廸也訳）がある。同時期、犬橇で北極点をめざしていた米国のウイル・スティガーと奇跡的に出会い、これがきっかけでこの南極大陸横断の計画が生まれた。

南極半島の先端をスタートし、四ヶ月半で極点に達し、ソビエトのボストーク基地を経てミールヌイ基地に到る最長の横断ルートである。この困難に加えて、文化、言語、習慣の異る六ヶ国六人の編成である。唯一国境のない大陸の平和利用と南極条約の継続を訴えた遠征隊で、隊そのものが国家の枠を越えていた。

著者の経験は豊富で内容は多岐にわたっている。仏人独特の語り口には少しとまどう。恋人の手紙まで披歴してしまうのだ。この大らかさは日本人にはないもので、ウィルとの確執も包み隠さず語られる。六人の個性と人柄がよく伝わってくる。小さな感情の行きちがいはあっただろうが、国際隊にありがちな自國のエゴによる内部分裂はなく、見事なチームワークを実証している。ルートやメンバー構成をみて周囲から成功を危ぶむ声があがったという。だが著者は言う。「文化や言語、習慣の違いが弱点ではなく強みになった。」と。この言葉が印象的で、この隊の全てを物語っている

巻末には日本から参加した舟津圭三氏への訳者によるインタヴューが収められている。著者の思い違いや誤解が語られていて興味深い。六隊員がそれぞれの立場から横断記録を綴り、それらを比較検討するのもおもしろいと思う。いずれにしても、このような発想と実践が、これからの地球に住む我々への行動の指針となり、生き方のひとつのモデルになれば、と願わずにはいられない。

一九九一年六月十五日発行　早川書房刊　四〇一頁　定価二五〇〇円

（宇都木慎一）

西堀榮三郎選集

全三巻・別巻

㈱悠々社刊

西堀栄三郎氏の話は聞く者を魅了した。新鮮な発想とユニークな展開、関西人ならではの柔らかい語り口が人の心に浸み込み、発酵し、まるで細胞が分裂するように、西堀流の創意と情熱が聞く人のなかで増殖していく。その

おしゃべり上手の西堀さんが例のちゃめっけたっぷりの表情で、「書くのは苦手や」と、よくいわれた。私はそれをずっと信じてきた。

だから『西堀栄三郎遺稿・追悼集』は一冊の本だと誰もが信じてやまなかった。作業を始めると、一冊ではとても収まらない。「人生は探検なり（西堀栄三郎自伝）」、「未知なる山・未知なる極地」、「技術の創造と品質管理」そして別巻は「人生にロマンを求めて（西堀栄三郎追悼集）」と、四巻本にふくれあがった。生涯の山友達となる今西錦司との出会い、日本の登山界の黎明期からヒマラヤへ、南極へと一時たりとも止まることのない探検の人生が、四巻本に展開される。

本格的な登山は一九一八年、北アルプスにわらじ脚絆を巻いて金剛杖、といういでたちで登った中学四年生の時からだという。「山は尊い。苦しんだあげく尾根にたどりついて、初めて見る黒岳や赤牛岳の白い残雪と這松の緑は、この世のものとは思えなかった。左に見える槍ヶ岳は『われこそは日本アルプス一の山であるぞ』といわぬばかりにそびえ立っている。甘え心の強い私は、すがりつきたいような感激におそわれた。それから後の山登りは、それが雪山であろうと沢歩きであろうと、いつも『山懐に抱かれていたい』という甘え心を私のなかにうごめかせた。岩登りをしているときも、すがりつくような気持ちであり、南極の氷原を行くときも大自然に溶け込んでゆく気持ちになるのだった」（一巻人生は探検なり）講演からは知り得ない、人間西堀栄三郎の再発見である。山に、探検に、技術に、盛んな「未知への探究心」を軸に友人の輪が、マナスルへ、ヤルンカンへ、南極へとダイナミックにひろがる西堀栄三郎の世界を『西堀栄三郎選集』は収録している。

別巻　一九九一年七月　四六判　約四五〇頁　定価四五〇〇円（税込）

一～三巻　一九九一年末　四六判　各巻三五〇～四〇〇頁　定価各巻三五〇〇円（税込）

申し込みは　悠々社　162新宿区神楽坂三－六ジーイジャパンビル二F　☎〇三－五二六一－〇〇五二

（堂本暁子）

〔自然保護随想〕

山地活用と国土保全

東京都民の森が、台風十二号による土砂崩壊で閉鎖された。この森は都心から遠く、山梨県境の奥多摩山地・三頭山（一五二八㍍）の中腹にある。

三頭山一帯は自然植生が豊かで、東京都には珍しく樹齢三百年を超える「ブナの自然林」がある。このため人気があり、昨年五月に開場してから閉鎖するまで僅か一年余りの間に三十七万人が入山した。しかし、その建設には自然保護団体や、学者などの猛烈な反対運動があった。筆者も工事中に現場を見たが手荒な工事に唖然とした。

都民の森の工事は、道路を開削した大量の土砂を斜面へ投棄したり、渓谷をコンクリートで固めて都市公園のような川にしていた。自然の地理や摂理を無視する暴力的工事に、ゴルフ場造成と同じ次元の低さを感じた。反対運動の団体や個人の真意は、設置に対してではなく、粗雑な工事方法の改善を求めるものだった。一時は工事も立往生し、環境庁が指導に乗り出すなど完成時の景観は、表面的に何とか、かっこうだけはついた。

ところが、今年は関東地方に影響する台風が多く、降水量も例年の三倍半を超えている。予期しない自然の猛威に「都民の森」は、脆くも崩壊し閉鎖という事態になった。以上の一件から思い浮かぶのは九州山脈中央部の純山村「諸塚村」の道づくりの理念と技術力である。

宮崎県東臼杵郡諸塚村は、戦後四十五年間村人が自分達で道路を開削し、驚異的な循環式高密度道路網を完成させた。急傾斜の山地に約三千人が、三戸、五戸、十戸と九十の集落に分かれ住み、集落の標高は二百㍍から一番高いところで千㍍近くにもなる。村人にとって道路は生命線。道路網の完成で林業活動が充実し、生活も豊かになった。山の環境は、針葉樹七割、広葉樹三割と均衡がとれ、風雨に強い体質の山となっている。

道路建設は、設計・測量・工事と段階ごとに、自然の摂理を重視し、故郷の山々と自然に愛情をそそぎながら事が進められている。完成後も山地と道路の保全に誠実な努力と工夫をしている。南九州は、台風の通り道だが諸塚村の山地や道路の崩壊はない。

都民の森は「森林空間利用」、諸塚村は「林業」と山地活用の形態は異なるが、いずれにしても国土保全に繋がることが望ましい。山と木と人の融合は、人間も自然生態系のひとつとして、自然に対する理念と心が不可欠ではないだろうか。

（上善峰男）

神々のみた氷河期への旅

小野　有五（文）
大森弘一郎（写真）

―空からみる北アルプス自然誌―という副題からもあきらかなように、この本は飛騨山脈の自然の成立ちを説明したものである。これを理解するためには、氷河期の山々の状態を知らなければならないというのが、著者の地形学者小野有五氏の主張であり、数万年前に氷河に覆われた山々を見ていたのは神々だけであったということから題名がつけられたようだ。

「写真そのものが自然誌」という著者の主張を実現するために、日本アルプスやヒマラヤの空撮パノラマ写真で名高い大森弘一郎氏の撮影した写真が全面的に使われている。しかも、半数以上の写真が立体視の可能なステレオ写真である。ステレオ写真でみる北アルプスの山肌は、大森氏のこれまでのどの写真でみるよりも、きめ細かく美しく見える。単写真でみる山とはまったく別物のようなすばらしさである。

小野氏の文章は随筆風であるが、小野氏自身の研究を中心に、氷河地形・周氷河地形・植生などに関する最新の情報が盛り込まれている。線状凹地の成因を研究者は「かってニヴェーションを信じたように」信じているとか、「双六氷床」が存在したというような、同業者からみてもドキリとするような刺激的な記述がある。

全体として写真と文章のバランスはよくとれているが、著者に執筆を決意させたと言うたいへんすばらしい厳冬の滝谷の写真に地形学的な説明がないのは残念だ。滝谷の研究がまったく進んでいないことが原因であろうが。

また、山域ごとのインデックスマップと写真との対応が一対一でないのが惜しまれる。全写真に番号をつけ、撮影方向を地図上に示すべきであったろう。巻末には組立式の簡易実体鏡がついている。性能がよいので誰にでも簡単に実体視ができる。ぜひ試みられたい。しかし、実体鏡を使わないで裸眼実体視するほうが、グラビア印刷の網目が消え、広い範囲が一度に見えるので、より美しく臨場感に溢れたものになる。

北アルプスの地形の肝心なところがきっちりと捉えられており、北アルプスを愛するものにとって見逃すことのできない好著である。

一九九一年八月三十日　丸善㈱刊
B5版横　Ⅷ＋八十八頁　定価四四二九円（税込）　（岩田修二）

稜線　六十年史

下関山岳会編

下関山岳会が昭和五年に創設されてから六十年になるが、今回その会報「稜線」の第四号が発刊された。その記念すべき六十年史は特集号であり、平成三年三月十七日の記念式典に参加して戴いた。

内容は「年表」「新聞等の記事から」「会員寄稿」の三部門で構成されている。

下関山岳会は地方の山岳会としては古く、昭和五年から現在まで昭和二十年の終戦の年を除いて、毎年たゆみなく山を登り続けた状況が全頁に克明に記されている。

地元の中国地方、九州地区の山に始まり、遠く北は北海道の大雪や知床の山々、次に海外のヒマラヤ、アラスカ等への遠征も数多く見られる。

しかしながら下関山岳会が情熱を燃やして開拓したのは伯耆大山のバリエーションルートであったと思います。会の創設者勝間健之介氏は大山をこよなく愛し、最後は大山で一生を終えています。遭難事故についても正直に報告されている点は感銘をうけました。

初代会長の木下友敬氏は下関市長や参議院議員もされ今は故人となられていますが、古い遺稿の記事がなつかしく、三編も組込まれていて感激しました。

現会長の岡本康夫氏が発刊の序文に「この会報四号は会の先達に捧げると共に、現会員や、これから入会し今後の会を擔う会員やこの〝稜線〟によって下関山岳会の積年の歩みを知り……私共は先達の教訓を守り、地域社会と共存して今後も会を維持し発展を期する…」と書かれていますが、私は隣の北九州市に在住し、この会報を読ませてもらって、たゆまず前進する下関山岳会をうらやましく思いました。

この六十年史と同時に第二号の復刻版も出されたが、下関山岳会が伯耆大山を開拓した最盛期の状況が報告されている。

平成三年三月　下関山岳会刊　二五四頁　非売品　（吉村健児）

ナムチャバルワ峰登山
上高地山岳研究所改築
合同募金に協力しましょう！

報告

立山全国集会報告

富山支部

期日　平成三年九月二十八～二十九日
場所　立山周辺
宿泊　立山高原ホテルおよび天狗平山荘（台風被害のため宿泊せず）
参加人員　一一七名

九月二十八日は皮肉にも台風十九号の北上に伴いJR北陸本線も不通、北陸地域の交通機関麻ひ、という状況に陥り、事前準備のため前日より宿泊中の地元会員（天狗平山荘宿泊）も台風の最中、参加途上会員からの連絡対応に、宿舎の被害処理に対応しながら受付業務についたが、台風通過後の情報、被害復旧に時間を要する状況下、参加者の減少は必定と考えざるを得なかった。夜になって掛け込み参加者もあったりして一二〇名余の参加者の顔が揃ろい〝山を愛する人は強い〟ことを証明した。

立山集会

「中高年登山者の立場」をテーマに開いたシンポジューム（内容次号）も会場は満員、熱のこもった質疑に終始、パネラーに県警山岳警備隊長谷口凱夫氏、県自然保護課長水口美之氏、文部省登山研修所長浦井孝行氏、日本山岳会小倉董子氏、司会者は日本山岳会富山支部長若林啓之助氏があたった。

近年立山周辺での遭難事故者は中高年登山者であり、とくに平成二年秋の真砂岳の遭難事故はその典型であり反省させられた。一方登山人口の増加による自然保護の問題も啓蒙の推進と登山者の自覚が急務、自然環境教育の問題も自然愛護につながり、一人一人の認識が問われるし、環境の整備、モラルの高揚などの対策が必要であることを確認し、盛会裡に終了した。

続いて懇親会にうつり、富山湾のブリの生き作り、銘酒「立山」での乾杯、標高二四〇〇㍍の高地で刺身が喰える時代になると自然も泣くだろうと思う。人間の情けなさを感じとれる時世である。

人間の心理改善を要する時代に陥ってしまった現在において、自己過信伸長による心の体力の怠慢から出る過ちと誤りが交叉するのを見直す機会を得たように思う。

二十九日は台風一過の晴天。立山頂上に向って長い長い行列が続いていた。中には鳥人もいたりして、年に数回しかない周囲の山容眺望は満点。台風下無理して参加してよかった、との声も多かった。

参加者の支部別は次の通りである。秋田(三)、山形(三)、宮城(三)、越後(三)、信濃(一一)、本部首都圏(四一)、京都(六)、関西(二)、山陰(七)、福岡(六)、東九州(三)、石川(八)、富山(二〇)、福井(一)　以上一一七名

主管した富山支部の充分なサービスも出来得なかったことを謝し、報告とします。

（石坂久忠）

「山を語る」講演会報告

集会委員会では「山を語る」と題して当会会員である神奈川県立相模台工業高校教諭広島三朗氏を講師に招いて十月二十三日(水)午後六時三十分から講演会を開催した。

この企画は広島氏が『山が楽しくなる地形と地学』という本を刊行されたのを機会に、日本の山の生い立ち等にも興味を持っていただければ一層楽しい山が出来ると云う趣旨で企画した。

『山が楽しくなる地形と地学』とスライド百枚を使い約一時間半にわたりユーモアのある熱弁をふるわれた。

講演の大要は次の通り。

①山はただ高所に登るだけでなく地形・地質に関心をもって欲しい。とくに日本列島は糸魚川・静岡構造線を中心に地層は旧い年代から新しいものまでまたフォッサマグマの逆断層など地形・地質が複雑であり、千五百万年ぐらい隆起した山地でも地質構造の違いによって雰囲気がまったく違う山容をみせます。

②日本の山で氷河地形が定説になっている南北中央アルプスおよび日高山脈以外でも、富士山や飯豊山地にも氷河地形があったという調査報告があります。穂高周辺では五～六万年前の亜氷期を横尾氷期、一～二万年前を涸沢氷期と呼んでいます。そして横尾氷期のほうが氷河は拡大していました。

このような考え方はつい二十年程前からです。多くの登山ガイドブックも最新の資料を記して欲しいものです。

③その他岩石と植物の関係、自然湧出の温泉、等、自分の足元の地形や地質

も含め自然界により一層の関心をもって常にその変化に疑問を持ち原因を探りながら、ゆっくりと登山をしよう。

最後に地形図のほかに地質図も持っていって欲しいものです。

参加者　四十三名

（石田要久）

ナムチャバルワ支援隊報告

大森弘一郎

参加者（年齢順）　権藤太郎、神原忠夫※、吉村健児※、室賀輝男、小田和美、小倉厚、山田哲郎、小松原一郎※、大森弘一郎※、高田昭則※、小山睦子、堀嘉余子※、佐藤知恵子※、浅井武（添乗員）、羅連絡官、李通訳

今回の「登山期間だけ、JACに解放された珍らしい地域へ、支援隊という名目でのみ行ける」と言うことで編成されたトレッキングチームに参加し、隊長ということになった。

単なる物見遊山でなく、何らかの目的を持ちたいと、将来の科学調査隊のヒントになるものを摑むことを、科学委員会の担当として隊員に協力を願ったりしたが、出発直後から、すでに単なるトレッキング隊ではなくなっていた。

大西君のご家族と同行する支援隊、と中国登山協会には理解されていた様であるし、我々の気持ちも大西君のご家族に同行する内に「支援隊」の名に近ずいていった。しかし、JACの仲間のつながりの中で、むしろこの方が自然であった。今思えば、本隊に対し、わずかでもプラスになる何が我々なりに出来るのか、を皆で熟考し、その準備をしっかりしておくべきであった。

現地についてから、あれも、これも、やっておけば良かったことを後から思うしまつであった。

行程を報告するならば、十月二十日（日）…成田発、北京で中国登山協会の招待を受ける。二十一日…成都に入る。二十三日…ラサへ入る。午后お一人発病。二十四日…大西君ご家族BCへむけ先行。夜BCと無線連絡つく。二十五日…入れる病院をやっと見つけ入院手配。二十六日…ラサ発、ランドクルーザー四台で八一鎮（パーイーチン）へ、四四〇キロの悪路の旅。途中五〇〇〇㍍の峠を越える。二十七日…米林を通りキーカルへ。キーカルの少し手前で大西君ご家族が帰国の途につかれたのにお会いし、大西君の遺骨をお見送りする。一台がスプリング故障し応急修理する、BC着午後五時。二十八日…一部を残し、大西君の焼場往復（四一五〇㍍）。二十九日…二隊に分れ、C1へ本隊の安全祈願のタルチョを帰路の道すじへつけに、また裏山の四〇〇〇㍍の展望の良いカルカへ。夜C2と皆で交信と中国側総隊長以下皆さんと交歓する。三十日…九時四十分、BC発。村木総副隊長をはじめ皆さんの見送りをうけ、山田総隊長と共に降る。キーカル経由八一鎮へ。三十一日…二十一時ラサ着。途中、スプリング故障二台、パンク二回発生。着後、ラサ−カトマンズの席がキャンセルされていることを知る。十一月一日…七人・七人の二隊に分け、一隊は小倉厚隊長のもと、浅井氏と共にラサ三日発、成都経由東京五日着で帰国することとし、一隊は大森が隊長で通訳の丹氏と陸路でカトマンズへ降ることとする。（この隊のメンバーにはメンバー表に※印がついている）、退院手配出来る。二日…山田総隊長を見送ったあと、成都チームの見送りをうけ二台で出発、シガツェに入る。途中大竹峠まで舗装道路、しかしその後すごい。三日…シガール（四三〇〇㍍）へ。砂漠の中の道、途中の最高点カツオー峠は五二二〇㍍。四日…国境の町ザムーンへ。途中五一〇〇㍍の峠よりゴザインタンが良く見える。五日…国境をこえコダリへ。カトマンズ着十四時三十分、夜カトマンズ発。六日…成田着。一方、成都チームは三日…ラサ発、四日…成都発、香港経由で、五日…成田着。カトマンズチームは好運にも順調、成都チームは成都−北京が取れず苦労があった。

BCに入るまで天候は不順であったが、我々がBC入りした日、ナムチャバルワの頂上が雲間に見え、次の日から好天となり、支援隊が好天を持って来てくれた、と言われた時は偶然とは言え嬉しかった。本隊のテントを使わせてもらい、三泊滞在する間に、大西君の焼場（カルカ）へ。本隊の安全を祈ってのタルチョを道すじにつけにC1（四三〇〇㍍）へ、展望の良い裏山のカルカ（四〇〇〇㍍）へ、と行くことが出来た。

BC周辺の植物や、地形を充分に見ることが出来た。我々が着いた時、山田総隊長、村木総副隊長、小島ドクターはおられたが重広隊長以下登攀隊はす

ナムチャ BC にて

でにC2を目ざしており、会うことが出来ず、無線での話に終ってしまったが、BCを去る前後、C2、C3へ無線で皆んなが交互にメッセージを送り、上のメンバーと親しく話すことが出来た。我々も嬉しかったが、上の人に何がしかの激励が出来、安全と成功への願いが通じていれば嬉しい。

自分のいる所のすぐ近くの上部に仲間がいることの実感は、ナムチャバルワの実像を間近に見たことに加え、本隊の活躍を我々自身のものとしてくれた。この気持ちは我々が日本に帰っても、変らずに持ち続けるものだ、と上の人達に伝えた。

後藤幹次さんを偲ぶ
「幹山会の集い」報告

山形支部　梅津　博

昨年の全国支部懇談会山形集会「蔵王の集い」を前にして、十月二日に亡くなられた元山形支部長、後藤幹次さんを偲ぶ「幹山会の集い」が、十月二十六、二十七の両日秋の蔵王で開かれました。

生前、後藤さんのスケッチブックを持った山登り姿は有名で、絵などに好んで使われていた雅号の「幹山子」からいただいて「幹山会の集い」としました。会場のとどまつヒュッテは、後藤さんが四季折々にたずねられ、ひとときをすごされたところで、五十余名の山の仲間、後輩、酒友、絵の仲間が集まりました。

後藤さんの山のスケッチ画抽選頒布などもあり、なごやかに夜半まで続きました。

翌日は、後藤さんが愛敬してやまなかった三宝荒神山直下の蔵王地蔵尊に全員で花を手向け香を焚き後藤さんに思いを巡らせ、冥福を祈りました。

出席者　後藤三郎（後藤家）、長島春雄、林田豊三郎、五十嵐俊治、清野恒、小倉茂暉、小倉董子（以上東京）、熊谷正志、熊谷藤子、蓬田時男、蓬田三枝子（以上宮城）、河上鐐治、安藤治、鈴木嘉、野地克也、高野加代（以上福島）、柴田均二、鈴木清（以上秋田）、大橋克也、金森繁三郎、田宮良一、阿部勇作、斎藤哲郎、畠中六左エ門、加藤達男、水沢富一郎、真田匡三、大場俊司、折原栄悦、長岡伸恭、梅津博、菊地俊彦、木村喜代志、佐藤誠二、清水弥栄治（以上山形）、吉田宗元、生亀知侑、大滝橘朗、小野浩治、前田久二、高橋俊夫、土井義博、松ノ井薫、田中邦太郎、松田良男、志鎌達一、柴田武、柴田萬理子、中山誠一郎、森山憲治郎、長谷川利貞、渡辺仁、岡崎好男（以上会員外）

なお、この会の記念品として用意しました後藤さんの蔵王スケッチ画複製の残部が少しあります。ご希望の方は山形支部へご連絡下さい。

雨の西沢渓谷
カメラで親睦を深める

フイルム・ビデオ委員会では集会委員会と合同で、さる十月二十七日（日）山梨県・西沢渓谷を訪ねた。「秋を撮ろう」ということでバスをチャーターし、会員をはじめ会員の家族、友人ら四十六名で現地へ出発したが、当日は早朝からあいにくの雨。参加された方には気の毒であったが、雨天では撮影も出来ないので、その代り車中を利用し羽田栄治F・V委員長をはじめ森宏子委員を講師として写真ビデオ講座を行った。現地では、二班に別れ雨中カメラ片手に渓谷歩きをする決行組、いっぽう渓谷入口にある東沢山荘で写真談議を楽しむ停滞組とに分かれてそれぞれ有意義な時間を費やした。

紅葉はいまひとつであったが帰路、勝沼でマンズワインの工場を訪ねワインの試飲にあずかり、また、ぶどう土産に、撮影会の目的は充分に果たせなかったが、山梨の秋を思い思いに満喫し、さらに会員相互の親睦を深めた。

また、この撮影会を拡大してJACカメラ・ビデオ同好会を作って欲しいとの要望があり、早速、年内発足の方向でまとめることとした。なお、内容については未定であるが楽しめる会にしたいと考えております。

（羽田栄治）

平成三年度第一回
岩登り講習会

小川山　十月五日（土）～六日（日）

岩を降りたったとき、すっかり口のなかはからからに渇き、荒い息ずかいでした。ただひたすらに神経を集中していました。降り出した雨に岩のくぼみが見ずらくなり、不安定な足場に不安な気持ちになりました。ザイルの上端にむけてかぎりない距離を感じながら、いっしんに登りつめて、やっとの思いで手の届くところにきました。

何回かの練習を重ねるうちに、だんだんゆとりができて、周りの景色を楽しむようになりました。廻り目平もそろそろ樹木は錦の衣を纏いはじめ、秋の到来を告げていました。

はるか若かりし頃に思いをはせ、六甲の不動岩に遊んだ情景が浮かびました。重い鋲靴をはいて、肩がらみの懸垂下降で、手に火傷を負ったことがありました。麻のザイル全盛時代でエイト環もなかったように思います。ク

レッターシューズの感覚もだんだんつかむことができ、岩にすいつくような感触に喜びすら覚えはじめました。

このところ週末はほとんど悪天に見舞われ、あんのじょう講習初日は雨模様の天候のなかではじまりました。午後の懸垂下降の練習がはじまる頃、本降りになり早々に切り上げました。

翌六日はなんとか持ちそうです。二パーティにわかれて、練習開始しました。ときどきパラパラ降られましたが、岩場も乾き楽しみながら受講しました。

指導者の適切な訓練に、短いながら大変有意義なひとときでした。素晴らしい企画に感謝致します。

参加者　熊崎和宏、西村哲、山本俊雄、村井龍一、勝山康雄、入澤郁夫、関崎健弘、松原尚之、岡建治郎、石川慶英、柳下棟生、堀川清、山口暁、中西光子、原利恵子、船谷武道、薮田益資、千田武久、平井順子、田寺尚和、継松義彰、西方昇、谷口久子　（**薮田益資**）

訂正　十月号（五五七）三頁一段目後より二行目「……を経営して……」とあるのは「……に冬営して……」、十一月号（五五八）二頁二段前より七行目「長野妙子も」とあるのは「長尾妙子も」の誤りにつき訂正致します。

越後支部親睦登山

平成三年度は、大佐渡山脈を舞台にして(2)

金北山の北に長く延びた斜面を緩かに下る。残雪を踏み林間を抜け、思い思いに写真をとったり話をしたりしながら飛ばす。さまざまな植物の群れはいままさに生きる喜びを謳歌しているが、なかでも清楚な花を惜しげもなく付けたシラネアオイとカタクリの大群落が、見事なお花畑を構成している。

植物に精しい高橋庄一会員が、歩いたり立止まったりしながら、目にとまる草木の名前を次々と教えてくれる。私などそのときは覚えたつもりでもすぐ忘れてしまう。なかなか記憶に定着しないのは、植物への関心と愛情と努力が不足しているせいかもしれない。

やがて広々と開けた草原に着いて休む。気分のいいところだ。雨の方も私たちにペースを合わせて一服しているらしく、辺り一面に濃いガスが立ち込めている。それから暫く主稜沿いに進む。烈風がシベリヤ側から吹き寄せ、大声をあげて体にぶつかり、目もあけられないほどだ。これだから佐渡の山はこわい。まるで二千㍍級の稜線を歩いている感じだ。長年の風雨雪に叩かれ削られ磨かれた倒木の根の塊りが一個、さながら前衛芸術のオブジェを彷彿させる姿態で横たわっている。この辺りは天気がよければ日本海が足下に見下せるが、今日は完全に駄目である。

十時半南石花を越え、二十分ほど沢沿いに下り水場に着いて大休止をとり、中食にする。この辺り一帯も広大な草原が延びていて、艶やかなオレンジ色の花をこぼれんばかりに咲かせたレンゲツツジの大群落が、現世から隔絶したパラダイスを形づくっている。ここで藤井会員から、山の地形、地名の由緒、歴史などについて興味深い説明があった。

ちょうど一時間ほど休んで出発し、レンゲツツジやウツギなどの花が両側に咲き乱れる道を下り、一時間半ほどで石花に到着した。ここで一同揃って写真をとり、バスに乗って帰途につく。再び車中の人となり、窓外の風景を眺め雑談を交わす。雨がまた降り出した。車が相川町に入ると、「美人多し、スピードを落とせ」と書いた交通標識が、国道三五〇号線道路わきのところどころに立っている。バスは佐渡女子高校の前を通り過ぎ、午後三時半に銘酒天領盃酒造所の佐渡銘醸会社の店の前に到着した。一同それぞれ銘酒の幾品目かを試飲したり、酒造工場の作業行程を見学したりして暫く時間を過す。今日帰る組（私もその一人）は、ここから「やまき」ホテルのバスで両津港へ向かう。一方、残留組は「やまき」ホテルでもう一泊した。

三日目は雨こそ降らなかったがどんよりした曇り空で、低くたれこめた鉛色の雲の下を予定通りドンデン山に登り、その周辺の高原を探勝した後、青粘越から梅津口へ下り、バスで両津港へ出た由。

五月末のころは、佐渡観光の旅に最適のシーズンであるが、この登山会はあいにく天候に恵まれなかった。とはいえ、初夏の大佐渡山脈の核心部に足を踏み入れ、眺望を楽しめなかった代りに、足下のいろんな草花を鑑賞しながら雨の中を歩いて、この山塊の特異な魅力を存分に味わった。帰りの車中では、早くも来年はどの山になるかなどの話が交わされていた。

参加者　**A・Bコース**　佐藤一栄、高橋庄一、本望英紀、久保孝一郎、小林碧、小倉厚、篠原義子、山口悠紀子、佐藤徳松、田仁代、早川英夫、山崎幸和、原謙一、望月計市、白石田春治・同夫人、佐野加代子、山田勲、吉村健児、藤井与嗣明、五十嵐篤雄、所崎操子、**Aコース**　矢尾板二郎、矢尾板奈々子、筑木力、原田敬子、高橋清治、久世明子、高辻謙輔、山田智子、江田宗友、遁所彊二、上村幹雄、丸山祐一郎、

荒木正弘、高沢英雄、吉田昌子、橋本郁子、大竹洋子、郡司稔、山口寿一

（筑木　力）

会務報告

十月定例理事会

十月十七日(木)十八時～

場所　本会会議室

出席者　藤平、松田両副会長、小倉(茂)、大倉、大森、入沢、小倉(厚)、穴田、関口、石橋、藤井、南川、村井、山口各理事　飯野、中島両監事　橋本、西村、斎藤、湯浅各常任評議員

委任……山田会長、神崎理事

＊議事に先立ち、早大トリボール隊より帰国挨拶と協力へのお礼があった。

議事

(1)大西隊員のナムチャバルワ遭難報告の件

十六日十四時十五分、大西隊員が雪崩に巻き込まれ遭難死したことを確認した。

十月二十日、両親と姉が現地へ行く。JACからは橋本清、佐野哲也の二名が付き添う。橋本常任評議員は登山隊の留守本部責任者であるが、付き添い役として適任なので、橋本氏に正式に依頼した。

(2)山岳研究所の件

十月十九日に松本土建と正式に解体作業の契約をする。

(3)HAT－Jの件

資金、人数動員、四団体内の意見調整を行っている。当日は是非ご協力をお願いしたい。

(4)秩父宮記念学術候補者推薦の件

科学研究委員会からは「登山医学研究会の業績」を推薦したい由の報告があったので、これらを踏まえて理事会に先立って常務理事会で検討の結果、次のように取り計らいたい旨小倉(茂)理事より報告があった。

①本会が平成二年十月に推薦した「三国友好登山隊の学術報告」は二年間は有効であるとのことで、推薦がなくとも本年度の審議の対象になる。

②本年度は「三国友好登山隊の学術報告」は再提出せず、当会としては新たに「登山医学に関する研究」を取り上げて推薦することにしたい。

〔追記〕

その後、推薦文担当の関口理事、大森薫雄氏等で具体的に検討を行った結果、本年度は時間的余裕無く、推薦を一年先に延ばすことになった。

(5)監査報告

十月十六日、大倉理事立ち合いのもと、飯野、中島の両名で中間監査を行った。

(6)「アドベンチャー二〇〇〇」の件

小野有五、松沢哲郎両氏の派遣を推薦。

〔追記〕

本件は二氏を推薦したが、申し込みが遅れ参加は間に合わなかった。

(7)インド登山財団からの申し入れの件

一九九三年インド登山財団がエベレストの登山許可を得たので、女性によるエベレスト合同登山をJACと行いたい旨の申し入れが十月八日に届いた。

(8)「日本山岳会選定三〇〇名山」の件

「三〇〇名山」の選定のいきさつについて明確にしておき、盛んになりつつある三〇〇山登山はJACとは無関係ながら、火山等危険な山は目指さないよう注意を促す必要があるのではないかという提案について検討。

(9)秋田支部から要望の件

秋田支部では韓国山岳会慶南支部との間で、秋田の太平山と智異山の「姉妹山」の締結をしたいので、日本山岳会の名称を使用したいとの要望があった。承認。

(10)その他報告事項

＊立山集会は台風の中一二〇名が参加

＊年次晩餐会は十二月七日、新高輪プリンスホテル「パミール」で開催。

＊十月十二～十三日、秋田県八森で女性懇談会全国集会。七十二名参加。

＊山研は十月二十日閉所。利用者は九月末で五五三名。

＊合同募金は、会員募金……一四、七六七、一九九円（七七八名）　企業募金……一六、八五五、〇〇〇円（申込みのみも含む）

＊十一月二十八日、冬山講習会。富山県警察警備隊長谷口氏講師に予定。

＊十二月に「登山医学」第十一号発刊予定。

＊大蔵喜福氏のマッキンレーの観測を継続発展させたい。

＊東海支部は気象観測ロボット設置のためネパールに隊員を派遣。

入会承認者……白鳥勝治氏他十七名

ルーム日誌

（10月）

2日　青年部、HAT－J会議

3日　学生部、女性懇談会

7日　総務委員会、自然保護委員会

8日　図書委員会、スケッチ同好会

15日　学生部報告会、フイルム委員会、山研委員会

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

16日　監査、三水会、ナムチャバルワ遭難対策本部
17日　常務理事会、理事会
21日　新入会員の集い
22日　自然保護委員会
23日　「山を語る」講演会
24日　科学委員会、学生部、女性懇談会
28日　資料委員会
31日　学生部

10月来室者506名

会員異動　10月

退会
大津省吾（四四七八）

物故
長谷川恒男（八四六七）　10・10
大西　宏（一〇一三一）　10・16
斉藤　時雄（七八六七）　10・27

山研・ナムチャ合同募金応募状況

（十一月五日現在）

（二十口）若林啓之助、（十四口）中島伊平、（十口）浦一美、奥原教永、小林茂、中島寛、柴田均二、加治甚吾、（六口）河野長、上條輝夫、酒井敏明、大塚博美、小林碧、西本栄一、堀田弥一、斉藤健治、高良博人、小田薫、岡本康夫、（四口）奥原宰、松本恒廣、滝和美、鳥居亮、村田数之亮、北野忠彦、村上勝太郎、青木巌、中村義、山下正代、中嶋正夫、河野幾雄、田中成三、石井恵美子、故長谷川恒男、柴田厳太郎、大森薫雄、（三口）宗實二郎・慶子（二口）加藤治康（非会員）、小松宣暉、黒石恒、鶴田稔、高島法男、宮崎和夫、久保田宣夫、山田信明、早津忠保、飛田彰、米村清一、伊藤裕泰、佐伯久雄、羽賀正、塚本茂樹、三溝関治郎、近藤育代、油谷次康、小林忠治、浜口欣一、蓬田時男、蓬田三枝子、田上敏行、松林のり子、平山武志、金光義朗、北島光子、船越好文、川北仁、鈴木松三、宮城恭一、高緑繁伸、千田早苗、北原正宣、富田健一、北村猛、赤井一隆、岡沢祐吉、種村重明、湯本一彦、穂苅康治、薬師義美、尾上昇、吉田賢男、吉田博至、長田健三、中山昇二、出口一良、市川正、太平展義、望月達夫、安藤直彦、長坂洋一、藤本三樹雄、水谷弘治、平野明、平岡誠一郎、湯浅充泰、松田孝一、大阪大学山岳会、上野毛戸康男、前田文彦、原田敬子、金澤守恭、宮入保徳、田村佐喜子、西尾俊子、相模八郎、森宏子、石崎晴一郎、松本徑夫、佐藤光、田中仲治、山本治美、（一口）藤崎昌美、武田敏、布目治二、阿部和代、堀邦昌、北沢清行、有賀幸子（〇・六口）加藤達三郎、（累計八百五十九名、三千百四十九・六口、一千五百八十万五千百九十九円）

☎ 3234-6659
この電話でもお知らせしています

◉図書委員会の催し

(1)第二十回山岳史懇談会
題目　関西学院大学山岳部七十年の歩み
講師　橋　真琴氏
期日　二月十四日(金)六時三十分より

(2)第二十三回山岳図書を語る夕べ
テーマ　ヒマラヤ文献目録とその周辺
講師　薬師義美氏
日時　三月三日(火)六時三十分より
場所　山岳会ルーム

(3)第二十九回この一本展
〝山岳図書を語る夕べ〟に併催

◉後藤三男油絵展

―信州の山と安曇野を描く―

日時　平成四年一月十七日(金)～二十二日(水)
場所　東急日本橋店六階　美術画廊

◉マッキンリー気象観測報告会

科学研究委員会

冬期マンキンリーの登山と気象遭難について、当委では九〇年二月七日に講演会を開き、その際状況の実体究明には現地における風や気温観測の必要なことが強調された。

当委員会後援の下に大蔵委員は同年夏、デナリーパス付近に自動観測計を設置した。強風のためピラーは十一月二十二日に倒壊、風向風速はその時点までしか測れなかったが、気温等は翌年夏まで測定できた。この観測は今後も引続き実施されるが、今回データの一応の解析が行われたのを機会に装置のセット状況や観測の成果、今後の計画などについて次のような報告会を開催する。

高所の気象遭難に関心のある方、その他多数の方々の来聴を歓迎する。

記

日時　平成四年二月六日(木)午後六時半～八時半
場所　JAC集会室
講師　大蔵喜福会員（かもしか同人）
テーマ　マッキンリー気象観測初年度の総括
会費　無料

◉アルパイン・スケッチ・クラブ
第一回作品展のご案内

期間　平成四年一月二十四日(金)→二十八日(火)
時間　午前十時三十分より午後六時ただし、最終日は午後四時まで
会場　東京電力電気温水器センターギャラリー（渋谷区道玄坂二―一六―六　☎三七七〇―一六一七）

第一回ASC展委員会

◉山と雪　竹節作太回顧展

志賀高原上林温泉の志賀山文庫では、標記特別展を開催しています。志賀高原へのスキーの帰路などに、是非お立寄より下さい。期日　一月末日迄

平成三年十二月二十日発行
102　東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　山田二郎
編集代表　小倉厚
電話　東京（3261）四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレースビル
印刷所　株式会社　技報堂